

## 源頼朝

源頼朝は、治承4年(1180)8月23日、伊豆の石横山に兵を挙げた。津戸三郎為守はこの戦いに加わった。「九巻伝」に、

津戸三郎菅原為守は生年18歳にして、治承4年8月に、右大将(時に兵衛佐)石橋の時、武州より馳せまいる(「法伝全」)。

とある。為守にとっては、初めての本格的な戦いであったであろう。おそらく手兵何騎かを引き連れ、勇んで鎌倉街道を馳せ参じたものと思われるが、間に合うか、合わないうちに頼朝は敗れてしまった。旗揚げから僅か5日であった。頼朝は「土肥(とひ)の真名鶴崎(まなづるみさき)より船に乗り、安房国に(「吾妻鏡」)落ち延びていった。主従わずかの逃避行で、先行きどうなるか分かったものではなかったが、為守は「房州へ越し給し時も同じく参向せしかば(「九巻伝)」とあるように、見捨てることなく供奉していったようである。誠実な人柄を偲ばせるものがある。

突然話が変わるが、JR湯河原駅の西の山手に、城願寺(曹洞宗)という寺がある。この寺は、この地の豪族土肥氏の菩提寺である。境内に頼朝主従七騎が、安房に向かって船出する時の像が建てられている。古いものではないが、そこに為守がいるかどうか興味があって見せてもらったところ、残念ながら彼の姿はそこにはなかった。中央に頼朝、右側に安達藤九郎盛長・土肥次郎実平・土屋三郎宗遠。左側に新開次郎忠氏、岡崎四郎義実・田代冠者信綱の面々であった。彼はまだここに名を出すほどの家来ではなかったということであろう。

津戸三郎の折角の初陣であったのに、華々しい結果にならなかったからといって、八つ当たりするわけではないが、大体頼朝という人は、戦いが下手だったのではないだろうか。その証拠に、彼が自分で采配を振るった戦いで、大勝したということを知ることがない。だから義経のような天才的な戦いぶりを聞くと、心底

怖くなって、足元を掬われるような気がしたのであろう。しかし、棟梁となる器量はあったのであろう。安房に逃れてからわずか2ヶ月足らずで、奇跡の再起を果たし、その年の10月6日、早くも鎌倉に舞い戻ったほどであるから、源氏の嫡男ということだけでなく、担がれるだけの器量を持ち合わせていたということであらう。

10月18日、態勢を整えた頼朝勢は、平維盛を大将とする平家の大軍と、富士川を挟んで対峙し、決定的勝利を得る。天下の大勢を決するような勝利であった。しかしそれも武田信義の軍が、平家の背面を襲おうとして進出したところ、富士沼の水鳥が一斉に飛び立ったので、その羽音に驚いた平家が、敵の襲来と間違えて壊走したのであって、頼朝の采配宜しきを得たということではなかった。平家の弱腰のためであった。

それに勢いを得た頼朝は、一挙に都を突こうとしたが、側近たちに諫められて鎌倉に戻っている。戦い上手な家来からみれば、ここはひとまず引くべきところであったのであろう。彼にはその戦機を見る目がなかった。家来たちも、彼の戦さ下手を知っているの諫言(かんげん)であったと思う。しかし、我を通さずにそれに従ったのは、頼朝の器量というものである。

その頃、天下は三分されていた。北陸から近畿・中国の一部までを制した木曾義仲勢。西走して中国西部と四国・九州に余喘(よぜん)を保ちながら、なお京都を狙っている平家一門。それに東国から攻め上ろうとする頼朝軍とである。やがて頼朝は、義経を大将に京都を攻め、義仲勢を破った。しかし、その頃すでに義経との間に、すき間風が吹いていた頼朝は、それ以後の瀬戸内の平家追討の総指揮を範頼(のりより)に与えた。しかし、彼も戦下手で、はかばかしい戦果を挙げることもなく、5ヶ月も対峙したままであった。

たまりかねた頼朝は、また義経を起用せざるを得なくなった。義経は命ぜられるや、150騎を率いて、たちまち屋島を奇襲して勝利を得、近隣の水軍を味方に引き

入れ、瀬戸内の制海権を掌握し、平家を壇の浦に追いつめてしまった。そして、ついに寿永4年(1185)3月24日、これを全滅させた。指揮をとつてから僅か40日足らずであった。この義経のあまりにも際立った戦いぶりに、勝利の吉報は頼朝にかえって恐怖を感じさせたようであった。頼朝と義経の仲については、いろいろな解釈が行われているが、基本的には、こうした構図によって動かされていたのではないかと私は思っている。

戦いは終わった。石橋山の拳兵から壇の浦の合戦まで満5年かかった。この間、為守についての記録は何もない。終始この戦いに従事していたであろうと思う他ない。(梶村昇)